

彩釉磁器

彩釉は、三代目徳田八十吉（1933-2009）が考案した現代釉薬の技法で、鮮やかな色の釉薬が融合して細かいグラデーションを生み出すのが特徴である。1997 年に重要無形文化財に指定された。

三代目八十吉は、徳田家の三代目として九谷焼の技術を発展させた。17 世紀の古九谷で使われていた釉薬を再現した祖父の初代八十吉（1873-1956）に師事した。初代八十吉は、上絵付けの技術でも知られ、その技は孫に受け継がれた。

三代目八十吉は、古九谷の青手の上絵付に特に関心を寄せていた。このスタイルは、赤を使わず、緑、黄、紫、紺などの濃い釉薬を使うのが特徴だ。この釉薬を現代風にアレンジできないかと試行錯誤していたところ、偶然にも、八十吉が後に彩釉と呼ぶ幻想的な色のグラデーションを発見したのである。通常より高い焼成温度で焼くことで、釉薬がビスクと融合するだけでなく、互いに溶け合うことで効果を発揮する。その結果、オーロラや超新星に例えられるような、ぼんやりとした色のスペクトルが生まれるのである。

1997 年、三代目八十吉は重要無形文化財保持者に認定され、彩釉の保存と普及に努めた。2009 年に死去したが、彩釉の技術を長女に伝え、長女が四代目八十吉（1961-）を襲名した。